石巻赤十字病院　被災地の最前線で実感した「つながり」の力
（金　愛子、3.11東日本大震災　看護管理者の判断と行動、2011、p.75-83）
2013年11月22日、災害医学抄読会 http://plaza.umin.ac.jp/~GHDNet/circle/

この記事は2011年3月11日に発生した東日本大震災後、石巻赤十字病院に様々な方面からの支えがあり、非常事態を乗り切ることができたということが記載されている。

では、いったいどのような方面から支えがあったのか、具体的にみていきたい。

災害直後の要援護者への対応について。

**1．在宅酸素療法(HOT)を受けている患者**

HOTの患者たちは、津波の被害や長引く停電のため酸素濃縮機が使用できなくなり、酸素を求めて多くが来院した。人数が増えるにつれ、酸素濃縮機が不足したため、近隣の病院が借り集めてくれた。それでも追いつかないため、地元の酸素業者3社が全国から集めた大量の酸素濃縮機を提供してくれた。発災前に契約した酸素業者でなくても、酸素濃縮機や酸素ボンベを提供してくれて、退院時に自宅に持ち帰ることも了承してくれた。また、パラマウントベッドからも簡易ベッドが提供された。

**2．透析患者**

市内の透析施設の多くが被災して水を確保できず、透析治療は困難であったが、日本透析医学会および日本腎不全看護学会の支援体制が全国的に機能しており、定期的に3人程度が応援にきてくれた。また学会からの申し出で、長期的に滞在して透析を受けてもよいという患者には、山形県や岩手県までバスで後方支援してもらい、透析を受けることができた。

**3．産科**

周辺の産科施設はすべて被災していたため、石巻赤十字がお産をすべて受け入れた。震災5日目には赤十字本社から応援の助産師が来てくれた。震災直後はミルクやおむつが不足していたが、支援物資が届き始めた。

**4．精神疾患の患者**

被災3日目くらいから精神疾患があると思われる患者が目立ちはじめた。これらの人々は、被災による薬の中断、震災のストレスが原因で症状が顕著になったのだと考えた。発作的に火をつけるなどの危険な行動もあったため、ボランティアできていた精神科医が対応してくれた。被災1週間後には赤十字本社からの精神科医師の応援もあった。

**5．スタッフ自身**

被災6日から赤十字本社から院内支援ナースが来てくれた。支援ナースの主な目的は看護師の応援だった。支援ナースが病棟にいるおかげで、被災したスタッフが家に帰る時間を作ることができた。

以上より、筆者はこのようにまとめている。

「赤十字には『人間を救うのは人間だ。』というキャッチフレーズがあります。今回、私たちもいろいろな人に助けられていることをひしひしと感じました。支援に入ってくれた医療者や自衛隊だけでなく、電気、水道、ガスの復旧にあたった人々、私たちは皆に救われたのです。」